

「日ソ戦争」帝国日本最後の戦い 麻田雅文著 中公新書

7. 11. 28 読書会

日ソ戦争とは1945年8月8日以降9月上旬まで満州（中国東北部）・朝鮮半島・南樺太・千島列島で展開された、両軍合わせ二百万人以上の兵力が動員された全面戦争である。この戦争がアメリカのソ連への参戦要請に始まり、日本の降伏受諾を挟んで続いたソ連の軍事行動、防戦側の日本政府・軍の実情、戦後世界政治へ与えた影響を本書はロシア・米国・日本の一次資料に基づき述べている。

日ソ戦争関係年表

- 45年2月 ヤルタ会談 「報酬」の密約
- 4月5日 ソ連は翌年期限切れの日ソ中立条約延長しない旨通告
- 5月7日 ドイツ無条件降伏（ソ連には5月9日）
- 7月17日～8月6日 ポツダム会談 8月15日参戦の約束
- 8月6日 米、広島に原爆投下。9日には長崎にも。
- 8月8日 ソ連が宣戦布告 満州、南樺太、侵攻
- 8月14日 御前会議で無条件降伏を決定
- 8月15日 昭和天皇が戦争終結の玉音放送
- 8月18日 千島列島最北端で開戦・満州戦闘停止命令スターリン
- 8月22日 南樺太中心都市侵攻
- 9月2日 米戦艦ミズーリ号で降伏文書に調印
- 9月7日 日本軍の武装解除

米国はソ連の参戦を熱望したが、ソ連は41年に日本と中立条約を結んでおり、また対独戦の真最中でもあり、腰が重い。45年2月ヤルタ会談でソ連が参戦すれば満州での利権、更に南樺太、千島列島も得られるという『報酬』を密約される。5月ドイツが降伏するとソ連は8月15日に参戦すると7月ポツダム会談に伝える。ところが8月6日に、思いがけず米国が原爆を投下する。日本が降伏する前に『報酬』を手にしようと、ソ連は8月8日深夜宣戦布告、翌日満州や南樺太へ侵攻、18日千島列島の最北端へ、22日は南樺太を空襲、その後各地で順次停戦するが今の北方四島まで進軍。日本軍の武装解除終了は9月7日。

○日本政府・軍の実情

日本は、軍事力や多くの人の目が南方や本土決戦ばかりに向けられ、中立条約を結んでいたソ連には甘い認識しかなかった。45年4月には条約不延長を通告されても、それでもソ連に米英との講和の仲介役を頼み続ける。

○ソ連の軍事行動

対独戦で2700万人が死亡し、国民は疲弊。そこで対日参戦の士気向上に利用したのが『歴史』。この『歴史』は必ずしも正確でない。日露戦争の小説が大量に刷られ、シベリア出兵中に殺された革命家の肖像が切手になる。『復讐』というプロパガンダが広く行われた。

○日ソ戦争の歴史的教訓

著者は歴史的教訓として「結局のところ、大日本帝国は、終わりに際してはあまり国民を守る戦いをしなかった。むしろ国民を巻き込む戦いをした。そんな戦いは避けるべき。万一の時、国民をどのように守るか、もっと議論を深めるべき」「また、今は台湾と中国に多くの人が目を向けている。しかし、当時も日本は南方だけを考えていた。日本の地政学的な条件は変わっていない。『北』も忘れてはいけません」と言う。それなのに多くの人は日ソ戦争を忘れていると著者は続ける。

○読み終えて

日ソ戦争のプロセスだけでなく戦後今も抱えている北方領土問題、シベリヤ抑留問題の原点、背景を知ることができた。

日ソ戦争での住民への過酷な対処を著者は「ロシアの戦争文化」と呼ぶ。スターリン時代に形成されたこの戦争文化や膨張主義戦略は指導者の特異なあり方から生まれたものか、独ソ戦争での膨大な犠牲ゆえに生まれたものなのか、昨今のウクライナ戦争を目の当たりにして考えさせられる。

佐藤博信